

## 「烏の北斗七星」論

A Study of 'The Grate Bear of a Crow'

高橋直美

TAKAHASHI Naomi

### (要旨)

宮沢賢治の『注文の多い料理店』に収録されている「烏の北斗七星」について、主人公が烏である意義、そして同書の広告にある「戦うものの内的感情」について考察した。

烏は山の神の使者であるとともに田の神（農耕神）の使者であるため、烏勸請のような儀礼が盛んになったようである。しかし、その一方で、烏が死をイメージさせるものであることから、「烏の北斗七星」の登場人物が烏である理由は、生と死の世界と表象させるのにふさわしい存在、そして、山烏が殺されることで山の神から田の神への春秋去来を、大尉（少佐）の生還から来るべき春（烏が夫婦で生活する期間）への喜びを表すことで、「田圃」の烏としての烏を表しているのではないかと考えられる。

群れを守るための烏の戦いは回避が不可能であり、自然界の掟は弱肉強食である。

しかし、一切衆生悉皆成仏を考えると、敵も味方も自利利他の区別もなく、そこにはただ仏法の法則、すなわち〈妙法蓮華経〉が存在するのみとなる。ゆえに、殺生という悪業を犯さなければ生きていけない烏は、転重軽受の功德を受けるために日蓮の法華経（北辰）を信仰する（妙見信仰）。烏の大尉の祈りは『妙法蓮華経 化城喻品第七』の「願意此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道」であり、賢治の信仰姿勢と通じているのである。

烏が妙見信仰である理由は、マジエルの由来が北斗七星を含む星座である大熊座の〈Ursa Major〉の〈Major〉に由来することから理解できる。なぜなら北斗七星＝北辰は妙見信仰として日蓮と深く関係しているからである。

また、北斗七星の一つである破軍星は、この星の方向に向かって戦いを挑めば必ず負け、この星を背にして戦えば必ず勝つとされているため武士の信仰が篤かったこともあり、軍人である烏たちも信仰したものと考えられる。

ところで、私見ではあるが、賢治の烏を観察する態度や視点は、A.T.シートンの『シートン動物記』に収録されている「シルバースポット」とよく似ている。烏を軍隊にたとえ、鳴き声を区別し、烏の生態のよき観察者としてのその才能をいかんなく発揮しているからである。

キーワード：烏、『シートン動物記』、日蓮、『法華経』、一切衆生悉皆成仏、破軍星、北斗七星

## 1. はじめに

本稿では宮沢賢治のイーハトヴ童話「鳥の北斗七星」(初稿の執筆は大正10年12月21日)について、なぜ「鳥」が登場人物なのか、そして、「戦うものの内的感情」とは何か等について考察する。

当時の不況下において兵役は農家の次男・三男等、いわゆる家長以外にとっては生活の糧を得る重要な手段であった。賢治は大正7(1918)年2月23日の宮沢政次郎あて書簡に、

今晚等も日露国交危胎等と折角評判有之定めし御心痛の御事と奉察候へども総ては誠に我等と衆生との幸福となる如く吾をも進ませ給へと深く折り奉り候間何卒色々御思案下されず如何にならとも知れぬ事に御勅勞下さらぬ様斯て御身体をも傷め候はゞ誠に皆々の嘆きに御御座候間万事は十界百界の依て起る根源妙法蓮華経に御任せ下され度候。誠に幾分なりとも皆人の役にも立ち候身ならば空しく病痾にも侵されず義理なき戦に弾丸に当る事も有之間敷と奉存候。

若し又前生の業今生の業に依り、来年昨来年弾丸に死すべき身に候はゞ只に今に至りて嘆くとも何の甲斐か候べき。

義ある戦ならば勿論の事にて御座候。

と述べているが、「鳥の北斗七星」の主人公である鳥の大尉(少佐)が作品の中で同じようなことを述べているため、これは賢治の根本的な考え方であると思われる。

また、大正9(1920)年7月22日の保阪嘉内あて書簡には、

陛下ノマコトノオホミタカラ。

大菩薩タチノ正シイ子孫。

ワガ勇マシイ若イ仕官。

グヅグヅノココロヤ、変ナ理窟ヤワケモ判ラヌ悲ミヤ途方モナイウラミヤラハ若イ兵士ノ呼気トナリ汗トナッテミナ日光ニ曝露サレソノ特性ヨミナ失ハレ七色万色相融合スル光明ノ中ニイツカ正シイ勢力ト変ル。

と、若い志願兵である親友・保阪嘉内に対する感想を述べている。当時の情勢や親友の入隊、本人の入隊希望(徴兵検査で不合格になった)を考慮しても、賢治の生活の中に軍隊がごく自然に溶け込んでいることから、賢治のこのような姿勢が「鳥の北斗七星」を嫌味のない純粋な物語として成立させていると考えられる。

一方、鳥の生体に関しては、E. T. シートン(Ernest Thompson Seton)の『シートン動物記』(『Wild・Animals・I・Have・Known』)にある賢い鳥の話「シルバースポット」(「Silverspot」)を参照した。「鳥の北斗七星」と「シートン動物記」を比較研究した文献は管見では見当たらなかったが、「シルバースポット」に記されている鳥の特性は「鳥の北斗七星」と大いに共通するものがあり参考になるため、本稿では「シルバースポット」との比較を試みた。

そして鳥の生態や日本、特に東北地方の風俗・民俗を参照しながら、鳥が登場人物である理由や「戦うものの内的感情」についても、宮沢賢治の法華経思想や作品、生活面等から考察した。

## 2. 鳥について

「鳥の北斗七星」の冒頭には、

つめたいいぢの悪い雲が、地べたにすれすれに垂れましたので、野はらは雪のあかりだか、日のあかりだか判らないやうになりました。

鳥の義勇艦隊は、その雲に押しつけられて、しかたなくちよつとの間、亜鉛の板をひろげたやうな雪の田圃のうへに横にならんで仮泊といふことをやりました。

とある。季節は冬、舞台は厳寒のイーハトヴである。

ところで、『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』に収録されているいくつかの作品の舞台でもある岩手山麓に鳥泊山という山があり、東に滝沢村と盛岡市街地、西に小岩井農場が位置している。小岩井農場周辺には「狼森と笹森、盗森」の各森が、北には「山男の四月」の舞台である西根がある。いわゆるイーハトヴ銀座に含まれるこの地域で、鳥泊という名はいかにも「鳥の北斗七星」の舞台にふさわしいように思われる。

鳥は春から夏にかけて卵を生み、子育てをする。秋になると群れでねぐらを作り、冬に近づくにつれて徐々に大きな群れになるというが、群れの中でもつがいは一緒に行動し、また春になるとそれぞれのつがいで生活を始めるといわれている。

この物語の鳥たちも、厳冬の悪天候を群れで一団となってやり過ごしている。

鳥はイーハトヴ銀座のある滝沢村では、「病気でねている時鳥がなければその病人が死ぬ」「鳥に糞をかけられるとその年のうちに死ぬ。正月の十六日の朝屋根に鳥がとまるとその年中に人が死ぬ」「夜鳥がなくと火事がある」(『農民生活変遷中心の滝沢村誌』「第四編 農民生活の変遷」滝沢村教育委員会 2011年)などといわれ、凶鳥のイメージをもち、死と関係するような位置づけをされている。

しかし、この地方の鳥は、『農民生活変遷中心の滝沢村誌』の「第四編 農民生活の変遷」の「民謡」に「竹には雀、お松に鳥、梅はうぐいす、きまりもの」とあり、凶兆だけのイメージではないこともうかがえる。

また、同「石塔類」には「八日、二十三日は山の神礼とて百姓が山に入り始めの日で年縄を明けの方の木にかけ『ポァポァ』と呼んで鳥を招き餅をやる風習がある。このとき鳥がよく餅を食べばその年は吉で災難なしとしている」とあり、初山との関連が見られる。同様に岩手県遠野地方でも「鳥よばり」といって、正月15日の日没前に小さく切った餅を枡に入れ、これをカラスに投げ与えるとされている。

柳田國男は昭和9年5月の「東京朝日新聞」に、

ミサキ鳥といふ言葉は、又宮島でも熊野でも聴くことがある。ミサキは先鋒であり、従つて神々の代表者といふやうな意味ではなかつたらうか。兎に角に人民ともつとも多く接触する神靈に、その名を用ゐた例が他にも沢山ある。(中略) 鎮守の社において行ふ鳥祭を、東北や越後は今も家々で、個々に営んでゐるのが多いことである。(中略)

福島県平付近の例をいふと、正月十一日の農立ての日の朝、今年苗代にしようと思ふ田に行つて初鋤をいれ、三所に餅と神酒洗米とを供へて、これを早稲・中稲・晩稲の三通りに見立て、置く。さうして大きな声でオミサキ・オミサキと喚ぶと、直ぐに鳥が飛んで来てその餅をくはへて

行く。どの餅を先に持つて行くかを見て、三種何れの稲が本年は当り作であるか決するのださうである（「鳥勧請の事」民俗一卷第二号）。

と記し、鳥が農耕神事と深く関係していることを述べているが、「ミサキガラスといふのは、茨城県などではハシボソガラスのことであつて、ハシプトの方はクソガラスといふ方言もあり、この仲間には入つて居ないらしい」（同上）と記している。「鳥の北斗七星」に登場する鳥も、田に住む主人公の隊がハシボソカラス、山に住む山鳥がハシプトカラスであるとする赤田秀子他著『賢治鳥類学』（1998年 株式会社 新曜社）に代表される見解が一般的である。

また、柳田は、

正月に鳥に餅を食はせる風習は方々にあるが、同じ東北でも土地によつてその式は少しづつ変つて居る。青森県の東の部分では、これを初山掛けといひ、正月八日の早朝に行ふ村が多いけれども、その初山も四日にする所、十一日にする所などが他にはある。 (同上)

と述べており、鳥勧請を初山とあわせて考えていることがわかる。

初山とは、正月の山仕事始めの儀礼であり、正月の2日、4日、8日、11日などとその日取りは各地ごとに違ふが、年頭の山仕事の始めを慎み祝い、山の神に仕事運びの順調を祈念するために行われる神事であり、山の神に供え物をして仕事の安全を祈念し、初伐りした樹木を小正月行事に使用するが多いという。初山を小正月の〈若木迎え〉とする所も多く、大正月の〈松迎え〉と対置している所もあるとされている。

しかも、「初山即ち若木採りの儀式と結びついて居るので、此木を山の神様、鳥を山の神のお使いと思つて居る者の多いのも、相応にいはいはれ困縁のあることである」（同上）とあることから、鳥は山の神のミサキ（お遣い）と考えられていることがわかる。

前述の赤田秀子他著『賢治鳥類学』には、

敵の山ガラスの特徴も、目玉が出しゃばっているところはハシプトガラスだが、肝心の嘴が細くはハシプトガラスにならない。里ガラスのなかにハシボソガラスとハシプトガラスの特徴が混在し、山ガラスの中にもハシプトガラスとハシボソガラスの特徴が混在する。（中略）これは声が壊れたのでも錆びたのでもなく、ハシボソガラス本来の声なのだ。宮沢賢治はカラスに二つの集団のあることを知っていたが、明確な種の識別までに至らなかった。それで個々の特徴を描くとき、混ざってしまったのであろう。

とあるが、賢治が鳥の大尉の群れと山鳥の群れを、ハシボソカラスとハシプトガラスとして、意識的に区別したかどうかは定かでない。反対に、その時々山で目にした鳥の姿や里で目にした鳥の姿（しかも、同一の群れではないもの）をそのまま描いた可能性、すなわち偶然そこで見かけた鳥を見かけた場所でわけ、山で見たものを山鳥、田で見たものを鳥の大尉の隊とした可能性もあるのではないだろうか。

その一方で、賢治が鳥の生態について詳細に観察していたと思われ部分が多々見られる。それは、E. S. シートン（Ernest Thompson Seton）が『シートン動物紀』（『Wild・Animals・I・Have・Known』）で、賢い鳥のリーダーとその群れを記した「シルバースポット」（「Silverspot」）の内容とよく似ている部分である。

### 3. Ernest Thompson Seton 「Silverspot」(『Wild・Animals・I・Have・Known』) との比較

1898年(明治31年)、E. T. シートン(Ernest Thompson Seton)は、主に自分自身の体験や見聞を基に創作した動物記の中から八編を選んで、『シートン動物記』(『Wild・Animals・I・Have・Known』)を発売した。「シルバースポット」(「Silverspot」)はその中の一編で、年老いてはいるが非常に賢い鳥の大尉であるシルバースポットとその群れの話である。シートンは、鳥は非常に賢く、堅固な組織力を持ち、一羽一羽がよく訓練されていると述べ、鳥が訓練されている様子を〈鳥の大学(college)〉と名づけている。

「鳥の北斗七星」で、賢治は鳥の群れを義勇艦隊と名づけ、鳥を軍人として描いている。船と見立てたのは鳥の身体が大きくて黒いこと、すなわちその形状からの連想であり、軍隊と比喩したのはその統率力と訓練の充実度からだと考えられる。指揮官と他の鳥との命令系統の発達と群れの様子、訓練された個々の能力、四六時中警戒を怠らない注意深さ等に、シートン同様、賢治も臨戦態勢の兵士のような雰囲気を感じたのではないだろうか。シートンは「シルバースポット」の中で、

Crows know the value of organization, and are as well drilled as soldiers—very much better than some soldiers, in fact, for crows are always on duty, always dependent on each other for life and safety. Their leaders not only are the oldest and wisest of the band, but also the strongest and bravest, for they must be ready at any time with sheer force to put down an upstart.

と記し、鳥を「solder」のようによく訓練された、否、人間の兵士よりもはるかに訓練された存在であると述べている。その理由は、鳥が生き延びるために群れの安全と命をお互いに守り合っているからだと言及しているが、鳥の大尉の群れもまた一団となってお互いの命を守り合いながら生活をしている。

賢治が鳥の大尉を「まつ黒くなめらかな」「若い艦隊長」とし、妻ではなく許嫁がいると設定していることから、大尉は大人になったばかりの若い鳥であることが理解できる。

鳥は繁殖期にはつがい生活するが、子育てが一段落するとまた元の群れに戻って生活するようになる。シートンはこれを「The reassembling」(動物学者の今泉吉晴は『シートン動物記』(童心社2011年)で「大集合」と翻訳している)と呼んでおり、そしてそこは若い鳥が安全に生きる知恵を学ぶための「鳥の要塞であり大学」(their fortress and college)になっていると述べている。

鳥のリーダーは強く賢いものになるといわれているため、鳥の大尉は所属する隊の中で一番賢く、勇敢で強いリーダーであることがわかる。

賢治が鳥を軍人に、鳥の群れを軍隊(艦隊)に例えたのは、日露戦争という時代のためばかりではなく、上記のシートンのような(観察者)としての能力によるものであり、その生態が訓練された軍隊のように規律正しく、そして隙のないものと感じたからではないだろうか。

シートンはまた、

He has hammered away at drill, teaching them all the signals and words of command in use, and now it is a pleasure to see them in the early morning.

‘Company I!’ the old chieftain would cry in crow, and Company I would answer with

a great clamor.

‘Fly!’ and himself leading them, they would all fly straight forward.

‘Mount!’ and straight upward they turned in a mount.

‘Bunch!’ and they all massed into a dense black flock.

‘Scattter!’ and they spread out like leaves before the wind.

‘Form line!’ and they strung out into the long line of ordinary flight.

‘Descend!’ and they all dropped nearly to the ground.

‘Forage!’ and they alighted and scattered about to feed, while two of the Permanent sentries mounted duty—one on a tree to the right, the other on a Mound to the far left. A minute or two later Silverspot would cry out, ‘A man with a gun!’ The sentries repeated the cry and the company flew at once in open order as quickly as possible toward the trees. Once behind these, they formed line again in safety and returned to the home pines.

として、「鳥の北斗七星」の演習同様、鳥の訓練を、まるで軍隊の訓練のように描いている。

シートンは、リーダーが群れの仲間に命令する鳥の鳴き声を聞き、鳥の言葉を分析した。それによると、鳥は「ca」と「caw」という、鳴き方のわずかな違いとその組み合わせで意味の違いを仲間に伝達しており、リーダーが指令を出した後、群れの第二位の鳥が復唱し、群れの仲間に伝えるようである。また、繁殖期が近づく4月初旬には上記以外に「c-r-r-r-a-w」という求愛の鳴き方をすることも観察されている。

「鳥の北斗七星」では鳥の大尉や兵曹長は「があ」と「があ があ」を使い分けており、大尉の許嫁は恋人との会話では「があ」でなく、「かあお、かあお」と鳴いていることから、「があ」「があがあ」は群れでのあいさつや指示の言葉であり、「かあお」は恋愛の鳴き方であると推察できる。しかしながら、求愛の鳴き声は通常はオスが出すものとされていることから、賢治がこの部分をメスも同様に鳴くと考えたのか、あるいは性別の区別がつかず、単に求愛の声として考えたのかは不明である。

以上のことから、賢治の描く鳥の世界はシートンの観察した『シートン動物記』の「シルバースポット」と多くの類似点があることが理解できるだろう。そして、それは鳥に対する深い愛情と真摯な観察から生まれたものであるという点において、シートンと賢治は一致しているのである。

#### 4. 夜の描写について

「鳥の北斗七星」には夜の不気味な描写がある。

たうたう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅がはいつて、まつ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下つて、鳥を握んで空の天井の向ふ側へ持つて行かうとします。鳥の義勇艦隊はもう総掛りです。みんな急いで黒い股引をはいて一生けん命宙をかけめぐります。兄貴の鳥も弟をかばふ暇がなく、恋人同志もたびたびひどくぶつつかり合ひます。

いや、ちがひました。

さうぢやありません。

月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、東の山から泣いて登つてきたのです。

そこで鳥の軍隊はもうすっかり安心してしまひました。

たちまち杜はしづかになつて、たゞおびえて脚をふみはづした若い水兵が、びつくりして眼をさまして、があと一発、ねぼけ声の大砲を撃つだけでした。

とあるが、夜の暗闇はなぜ鳥を恐怖に陥れるのだろうか。

『注文の多い料理店』に「かしわばやし之夜」という作品が収録されているが、そこには、

からすかんざゑもんは  
くろいあたまをくうらりくうらり、  
とんびとうざゑもんは  
あぶら一升でとうろりとろり、  
そのくらやみはふくろふの  
いさみにいさむものゝふが  
みゝずをつかむときなるぞ  
ねとりを襲ふときなるぞ。

という梟の歌がある。シートンは鳥の天敵を「owl」としており、鳥がいかに「owl」に恐怖しているかを、

There is only one time when a crow is a fool, and that is at night. There is only one bird that terrifies the crow, and that is the owl.

と述べている。

上記のように梟に「ねとりを襲」われるのは小鳥だけとは限らない。鳥は夜目がきかないため猛禽類の標的ともなるため、鳥にとって夜はまさしく恐怖の時間帯である。猛禽類に襲われれば鋭い爪で押さえつけられ、嘴で食いちぎられて殺される。夜目のきかない鳥にとって、夜は死に直結する恐怖と隣り合わせなのである。

18世紀に活躍したスウェーデンの科学者・鉱山技師・政治家・神学者・神秘思想家であるスウェーデンボルグ（Emanuel Swedenborg）は、死後に行く〈霊界〉とは彼方にあるものではなく、この宇宙において物質界（現世）と重層的に存在しているものだと述べている。「銀河鉄道の夜」の世界や「青森挽歌」に描かれている死後の世界を見ると、賢治は生と隣り合わせの異次元に死者の国を考えていたと思われるふしがある。

その死者の国の扉が夕方になると、「ぴちりと裂罅」が入って開くのである。そして、猛禽類に襲われるかのような夜の恐怖を「あやしい長い腕がたくさんぶら下つて、鳥を握つかんで空の天井の向ふ側へ持つて行かう」と表現したのではないだろうか。

しかも、鳥もまた、生きるために他の命を奪っている。殺生は仏教最大の罪であるため、食うものとしての罪業と食われるものとしての恐怖が夜の暗闇で混じりあい、鳥を恐怖させているのではないだろうか。

しかし、その恐怖の暗闇も月天子の登場で安心へと変化する。「月天賛歌（擬古調）」に「月天子すでに氷雲を出でまして／雲あたふたとはせ去れば／いまは怨親平等の／ひかりを野にぞながしたまへ

り」とあり、月天子は鳥の恐怖と罪の意識に対し、慈悲の光が降り注ぐからである。

## 5. 鳥の北斗七星信仰と戦うものの内的感情

以上のように、賢治は鳥を詳細に観察し、その生態をうまく利用しながら本作品を描いたと考えられる。なぜならば、『注文の多い料理店』の広告文に「これらは決して偽でも仮空でも窃盗でもない」、すなわち「心象スケッチ」であると述べられているからである。

作品には里(田)に住む鳥である大尉の群れと山に住む山鳥とが登場する。日本にはハシボソガラスとハシブトガラスが生息しており、赤田秀子他著『賢治鳥類学』をはじめとする先行研究では、生息場所と鳴き声により鳥の大尉の群れがハシボソガラス、山鳥はハシブトガラスと分類されてきたが、賢治がハシボソガラスとハシブトガラスの特徴を里で見かけた鳥と山で見かけた鳥とに分け、種別ではなく発見場所ごとの鳥(同種ではない可能性もある)を描いているのではないかと考察したのは前述のとおりである。

本来、ハシボソガラスは開けた農耕地や里に住むが、花巻や盛岡郊外など里と山との境界があいまいな地域では、小高い山裾等にもハシボソガラスが生息していた可能性があるのではないだろうか。そのため、山で見たハシブトガラスとハシボソガラスの両方からその特徴を選択し、山鳥の特徴として描いたとも推察できる。賢治は種類よりも単に山鳥の立派な様子(長所になるもの)を描きたかったのではないだろうか。

実際に「滝沢村有害鳥獣捕獲等取扱要領」(平成15年4月30日告示第188号)、「雫石町有害鳥獣捕獲等取扱要領」(平成17年2月9日告示第7号 改正 平成22年3月29日告示第57号)の捕獲等対象鳥獣及び捕獲等対象鳥獣の種類にはハシボソガラス、ハシブトガラスの双方が入っており、二種ともが同じ町村内に生息していることがわかる。

ハシブトガラスとハシボソガラスの生息地が混在している可能性は、前述『賢治鳥類学』にも「ハシブトガラスは都会や山に、ハシボソガラスは農耕地や河川敷など開けたところを好む。これもおおよそのところで、両者は混在することも多い」とあることから説明がつく。

ゆえに、ハシボソガラスとハシブトガラスという別種類による縄張り争いがこの作品における戦争の理由であると考えよりも、厳冬で食べるものがない鳥の群れの、餌場をめぐる対立だと考えるほうが無難である。すなわち里に住む群れと山に住む群れ(それが同種類でも異種類でも無関係に)が、厳冬の岩手で生き延びるために、わずかな食物と住処である縄張りをめぐって熾烈な生存競争を行っていたというのが、この作品の背景になるのではないだろうか。

生態学においては競争関係は種間関係の一つかたちであり、同じ地域に生息し同じ餌を求める二種の動物の間で行われる。そして、餌を奪われ、数を減らした方が競争の敗者となる。競争の対象は餌だけではなく、縄張りの場所など生息する土地もその対象になるが、生活上の要素が似ていることから、類縁関係の近い生物が最大の競争相手となる。この作品では、山鳥は「お腹が空いて山から出て来」たために殺されてしまうので、厳冬のイーハトヴにおける食糧難が要因として考えられる。

東北は昔から飢饉の多い土地柄である。太宰治が「津軽」に「大阪夏の陣、豊臣氏滅亡の元和元年より現在まで約三百三十年の間に、約六十回の凶作があつたのである。まづ五年に一度づつ凶作に見



舞はれてゐるといふ勘定になるのである」(『太宰治全集 第六巻』筑摩書房 1990年)と記しているが、そのたびに農民からも多く餓死者が出ている。

岩手県は「やませ」により稲が壊滅的な被害を受けていることは周知の事実である。賢治の時代にも何度となく飢饉が襲い、賢治自身も「サムサノナツハオロオロアル」くことしかできなかった。自然の脅威の前には人間は無力で悲しい存在である。賢治の時代にも東北は飢饉(食糧危機)という死に直結した恐怖が実際に起きていたこと、大正7年3月10日宮沢政次郎宛封書に「戦争は人口過剰の結果その調節として常に起こるものに御座候」とあることから、この物語も厳冬の食糧不足が鳥の生存競争を生み出したものと考えられる。

ところで、『注文の多い料理店』の広告文の「山男の四月」の欄に、「鳥の北斗七星といつしよに、一つの小さなこゝろの種子を有ちます」とある。

「山男の四月」の本文中から「一つの小さなこゝろの種子」にあたるものを探すと、

山男はさつきから、支那人がむやみにしやくにさわつてみましたので、このときはもう一ぺんにかつとしてしまひました。

「何だと。何をぬかしやがるんだ。どろぼうめ。きさまが町へはひつたら、おれはすぐ、この支那人はあやしいやつだとどなつてやる。さあどうだ。」

支那人は、外でしんとしてしまひました。じつにしばらくの間、しいんとしてみました。山男はこれは支那人が、両手を胸で重ねて泣いてゐるのかなとおもひました。さうしてみると、いままで峠や林のなかで、荷物をおろしてなにかひどく考へ込んでゐたやうな支那人は、みんなこんなことを誰かに云はれたのだなと考へました。山男はもうすっかりかあいさうになつて、いまのはうそだよと云はうとしてみましたら、外の支那人があはれなしわがれた声で言ひました。「それ、あまり同情ない。わたし商売たたない。わたしおまんまたべない。わたし往生する、それ、あまり同情ない。」山男はもう支那人が、あんまり気の毒になつてしまつて、おれのからだなどは、支那人が六十銭もうけて宿屋に行つて、鯛の頭や菜つ葉汁をたべるかはりにくくてやらうとおもひながら答へました。

という部分が目に留まる。この山男の心情から、自分を騙した相手であってもその人の幸福を祈る心、たとえそれが自分の命と引き換えであってもその人の幸福を祈らざるを得ない心が「一つの小さなこゝろの種子」にあたるのではないかと考えられる。

一方、「鳥の北斗七星」では鳥の大尉(少佐)が「あゝ、あしたの戦でわたくしが勝つことがいゝのか、山鳥がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません、たゞあなたのお考のとほりです、わたくしはわたくしにきまつたやうに力いつぱいたゝかひます、みんなみんなあなたのお考へのとほりですとじづかに祈つて居りました。」「あゝ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません」と願う部分が「一つの小さなこゝろの種子」にあたると思われる。

この作品の鳥たちは「マヂエル様」とよばれている北斗七星を信仰している。「マヂエル様」の由来は、北斗七星をその一部に持つ大熊座の学名表記“Ursa Major (ウルサ マヨール)”の“Major”を「マジョール→マヂエル」としたものと、原子朗著『新 宮沢賢治語彙辞典』(東京書籍株式会社 1999年7月)をはじめとする著書や論文等で一般に知られている。北斗七星は「星めぐりの歌」に

「あかいめだまの さそり／ひろげた鷲の つばさ／あをいめだまの 子いぬ、ひかりのへびの と  
ぐろ。／オリオンは高く うたひ／つゆとしもとを おとす、／アンドロメダの くもは／さかなの  
くちのかたち。／大ぐまのあしを きたに／五つのぼした ところ。／小熊のひたいの うへは／そ  
らのめぐりのめあて。」とあり、『銀河鉄道の夜』にも「北の大熊星」とある賢治作品では有名な星である。

北極星は古来より洋の東西を問わず天の中心であったこと、日本では妙見信仰の対象として特に日蓮宗で尊ばれていたこと等を考慮すると、賢治が北極星とその水先案内人である北斗七星を重要視したのは間違いないだろう。

また、北極星は道教では太一や北極紫微大帝の星とされるが、北斗七星も北辰として北極星同様重要な地位を占めている。道教では、北極星＝太一神＝泰山府君（道教の冥府の神）とされており、その従者である北斗七星は北斗星君と呼ばれている。北斗星君は〈死〉を司り、死んだ人間の生前の行いを調べて、地獄での処遇を地獄の王に命じるといわれ、罪を犯した人の魂を裁くという説もある。

では、なぜ、鳥は北斗星君である北斗七星を信仰するのだろうか。マジエル様こと大熊座の北斗七星には破軍星と呼ばれる星（ $\eta$  Ursae Majoris、ベネトナシュ、別名アルカイド、揺光）があり、この星の方向に向かって戦いを挑めば必ず負け、この星を背にして戦えば必ず勝つとされている。中世には武士の守護神として敬われ、千葉氏・相馬氏・大内氏など地方の豪族たちによって信仰されてきた。特に、千葉氏の妙見信仰は、

軍神たる北斗の「浄瑠璃世界主薬師如来」の破軍星である。その破軍星を真言密教では『類秘抄』や『平等房次第』に「虚空蔵尊」を本地と見たのである。妙見尊と虚空蔵（明星）の〈一体二身〉である。日蓮聖人が清澄寺で祈願した摩尼殿の虚空蔵尊の真裏の頂上が、妙見山であり、現在も小湊の漁民が篤く信仰する「妙見尊」が祀られ「一体二身」を表している。

（「日蓮聖人『立教開宗』における妙見尊と虚空蔵菩薩の関係」石川修道 『現代宗教研究 32号 NO. 8』平成10年3月 日蓮宗 現代宗教研究所）

とされており、破軍星を虚空蔵菩薩と見立て、妙見菩薩の一体二身とすると、賢治の信仰する日蓮と繋がるのである。

生きるために憎むことのできない敵と戦わなくてはならない鳥、生きるために殺生をしなければならぬ鳥は、生きることにより日々悪業を積んでいる。そして、その罪から救済されようと、マジエル様に祈りをささげるのである。

悪業に関しては、日蓮は「転重軽受法門」に、

涅槃経に転重軽受と申す法門あり。先業の重き今生につきずして、未来に地獄の苦を受くべきが、今生にかゝる重苦に値ひ候へば、地獄の苦みばつときへて、死に候へば人・天・三乗・一乗の益をうる事の候。不軽菩薩の悪口罵詈せられ、杖木瓦礫をかほるも、ゆへなきにはあらず。過去の誹謗正法のゆへかともみへて「其罪畢已」と説れて候は、不軽菩薩の難に値ふゆへに、過去の罪の滅するかとみへはんべり。

と記し、鳥たちの悪夢の根源であり生きることの原罪である悪業も、法華経信仰により誹謗罪障消滅ができると説いている。生きるために殺生を余儀なくされている鳥たちは、己の罪障消滅と一切衆生悉皆成仏、すなわち「憎むことのできない敵を殺さないでいゝ」世界＝仏国土（娑婆即寂光土）建設のため、マジエル様（妙見様）に祈りを捧げるのである。

生きるということは、鳥に限らず、他の命を奪うことでもある。賢治は大正7年5月19日保阪嘉内宛封書に、「私は春から生物のからだを食ふのをやめました」と記している。この菜食主義は「ピジテリアン大祭」の「仏教の精神によるならば慈悲である、如来の慈悲である完全なる智慧を具へたる愛である 仏教の出発点は一切の生物がこのやうに苦しくこのやうにかなしい我等とこれら一切の生物と諸共にこの苦の状態を離れたいと斯う云ふのである」と同様、生きるために他の生命を犠牲にせざるを得ないことは一切衆生の業であるが、この業から皆が等しく脱却したい、業苦から逃れたい気持ちも込められているのである。

このような業苦に関して日蓮は、〈煩惱即菩提〉、〈生死即涅槃〉を説き、「御義口伝上」の「五百弟子品三箇の大事」の「第三 身心遍歡喜の事」に「御義口伝にはく、身とは生死即涅槃なり。心とは煩惱即菩提なり、遍とは十界同時なり、歡喜とは法界同時の歡喜なり。此の歡喜の内には三世諸仏の歡喜納まるなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉れば、我則歡喜とて釈尊歡喜し玉ふなり。歡喜とは善惡共に歡喜するなり。十界同時なり。深く之を思ふ可し云云」と説いている。しかも、「寂日坊御書」に「南無妙法蓮華經の五字の光明をさしだして、無明煩惱の闇をてらすべしと云ふ事なり」とあり、鳥の無明煩惱の闇に光明を差し込むのは『法華經』であるため、鳥はマジエル様こと妙見菩薩に祈りをささげる。

賢治作品のキーワードとしてよく使用される言葉に〈自己犠牲〉がある。〈自己犠牲〉はキリスト教ではイエスが人類の罪を一身に受けて十字架にかかったことで〈愛〉とされ、仏教では捨身供養ということばで代表されるが、日蓮は「日妙聖人御書」で、

一念三千の肝心と申すはこれなり、而るをいかにとしてか此の功德をばうべきぞ、樂法梵志・雪山童子等のごとく皮をはぐべきか、身をなぐべきか、臂をやくべきか等云云。章安大師云はく「取捨宜しきを得て一向にすべからず」等これなり。正法を修して仏になる行は時によるべしと説き、今は捨身供養を行じる時ではないとして、無用に身命を捨てることを戒めている。

また、悟りを得るためや仏への供養のために不惜身命の信仰を行じた例として、樂法梵志・釈迦菩薩・雪山童子・藥王菩薩・不輕菩薩・須頭檀王が挙げられているが、彼らは末法の行者ではないとも説かれている。

鳥の大尉は許嫁や群れの仲間を守るために命を差し出そうとする。敵の山鳥も同様に食糧不足で死活問題に陥り、恐怖を抱きながらも家族や群れの仲間を守るため戦わなければならない境遇にある。そのことを理解している大尉は山鳥を殺したくはないし、また殺さなくていい世界になってほしいと祈りを捧げる。これは自分の命も他の命も平等であるという、一切衆生悉皆成仏の思想である。

堀尾青史は「賢治の『鳥の北斗七星』—その死を通じて生を知った私—」(続橋達雄編『宮沢賢治研究叢書6 「注文の多い料理店」研究Ⅱ』1975年 株式会社學藝書林)に、

賢治が盛岡高等農林時代は第一次大戦中だったから、兵役に取られればシベリア出兵ということもあり得た。そのため徴兵検査を延長するか、しないかを父といいあったことがあるが、大正七年父あて書簡に、

——戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候。その戦争に行きて人を殺すという事も殺す者も殺される者も皆等しく法性に御座候。

ということを行い、また、

——誠に幾分なりとも皆人の役にも立ち候身ならば空しく病痾にも侵されず義理なき戦に弾丸に当る事も有之間敷と奉存候

といっている。大正七年という賢治二十二歳で、一切法性の思想をすでに持っていたのだった。戦争いうものを宗教的次元で考え、義理なき戦いならば弾丸にも当るまいというのは近代戦には信じられないが、その信念の深さ。そしてカラスの大尉のいうように、戦争のない現世をつくるためなら、なんべんでも命をさしだすというのだ。死が平和と引きかえでなければ意義はないのである。

と述べているが、堀尾は賢治が戦争賛美をしているのではなく、戦争も学校も全ての現象は一念三千であり、万物は一切法性、すなわち一切衆生悉皆成仏であると述べており、もし命をさしだすにしても、それは恒久平和が前提となる、死身弘法でなければならないと指摘している。

戦争に関しては、賢治は「父上母上初め皆々様にも報じ奉る」(大正七年三月十日 宮沢政次郎宛書簡) ためと述べており、「若し入営の義務無之節は更に明るく愉快に吾れ人の為に勉励仕るべく候」(同書) として、兵役を勉学と同様に、親孝行や社会奉仕の一環として考えていることが理解できる。また同封書には、

子孫を断じ祖先の祭祀を停め候事は我国人として最大の不幸に御座候へども只今は何とも仕方なき時代に御座候 戦争は人口過剰の結果その調節として常に起るものに御座候 真実の幸福は家富み子孫賢く物に不自由なきときにも欠け候事多く誠の報恩は只速に仏道を成じて吾と衆生と共に法楽を受くるより外には無之御座候

と記し、戦争は人口過剰により起こる時代の必然であり、また子孫繁栄や蓄財が真の幸福とも言い切れない、本当の報恩というのは仏道を行じて「願意此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道」(「妙法蓮華經 化城喻品第七」) 以外にはないと述べている。

この世界は娑婆世界すなわち穢土であり堪忍世界であるが、日蓮は「観心本尊抄」で「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり。仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず、所化以て同体なり。此即ち己心の三千具足、三種の世間なり」と、また「報恩抄」では「極楽百年の修行は穢土一日の功に及ばず」と記し、成仏するためには穢土での修行が重要であると説いている。

鳥の大尉も様々な思いを抱きながら、それでも自らに与えられた道を行かざるを得ないのは、この世界で生きることが大切だからである。「銀河鉄道の夜」にも「ぼくたちこゝで天上よりももっといゝところをこさえなけあいけないうって僕の先生が云ったよ」とあるが、現世安穩後生善処の法華經信仰においては、今この場所で一生懸命に生き抜くことが肝心となる。

賢治はまた、大正7年3月14日前後保阪嘉内宛書簡に、

暫らく人をはなれませう。静に自らの心をつつめませう。この中には下阿鼻より下有頂に至る一切の諸象を含み現在の世界とても又之に外ありません。(中略)

衆生見劫尽 大火所焼時  
我此土安穩 天人常充滿  
園林諸堂閣 種々宝莊嚴  
諸天撃天鼓 常作諸技樂  
雨曼陀羅華 散仏及大衆

と記し、「退学も戦死もなんだ みんな自分の中の現象ではないか 保阪嘉内もシベリヤもみんな自分ではないか あゞ至心に帰命し奉る妙法蓮華經。世間皆是虚仮仏只真」と結んでいるが、これは「御義口伝」に「元品の無明を対治する利劍は信の一字なり」とあるように、どのような衆生の無明をも照らし、真実を明らかにするものは『法華經』だと述べているのである。

仏法は因縁論である。『法華經』は諸法実相を説き、日蓮は「五綱」(教・機・時・国・教法流布の先後という教相判釈)を説いているため、前述父宛の書簡にも「義理なき戦に弾丸に当る事も有之間敷」、つまり、もし死身弘法が必要であれば賢治は戦死するが時に適わない場合や縁がない場合は銃弾にすら当たらないと記し、暴論ではあるが、賢治なりに諸法実相の原理を述べている。

また上記保阪宛書簡にある「皆等しく法性に御座候」とは、現実世界を仏法の因縁論を述べたものであり、「鳥の北斗七星」の大尉のことばもまた同様である。これは、「御義口伝」「常不輕品三十箇の大事」の「第廿九 法界礼拝住処の事」に「仍て法界が法界を礼拝するなり自他不二の礼拝なり」とあるように、すべての法性の平等、法性に対する不輕菩薩の行を意味しているものと考えられる。

ところで、『注文の多い料理店』収録の「山男の四月」には、

「おまへはするとやつぱり支那人だらう。支那人といふものは薬にされたり、薬にしてそれを売つてあるいたり気の毒なもんだな。」

「さうでない。ここらにあるてるものは、みんな陳のやうないやしいやつばかりだが、ほんたうの支那人なら、いくらでもえらいりつぱな人がある。われわれはみな孔子聖人の末なのだ。」

とあり、同じ支那人でも「いやしいやつ」も「りつぱな人」もいることがわかる。その一方で山男自身はといえば、「町へはひつて行くとすれば、化けなくなぐり殺される」心配があるほど、町の人から迫害を受けている。ここでは差別の対象が外国人から〈異人〉となっている。人間は自分たちと異なるものに対して差別や恐怖を抱く。そのため、同じ人間である支那人よりも、住む世界や姿かたちの異なる山男に計り知れない恐怖を感じ、差別どころか危険な存在として命を狙うようになる。これは無知による差別であるが、山男が差別を受けてもなお差別をする相手や他の人々の幸福を願う姿勢は、一切衆生悉皆成仏を根本とした不輕菩薩の礼拝行に通じているのである。

『法華經』や日蓮はすべての法性の平等を説いているが、現実の世界には価値観の相違や無知による差別や迫害がある。仏教では法性は等しく成仏の可能性を秘めており、不輕菩薩の行と同じく、敵も味方も平等で差異なく、相手の法性をひらくことが重要となる。そして、そのためには「杖木瓦石・而打擲之」もあえて受けなければならないのである。

「妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十」には、

其罪畢已 臨命終時 得聞此經 六根清淨 神通力故 增益壽命 復為諸人  
 広説是經 諸著法衆 皆蒙菩薩 教化成就 令住仏道 不輕命終 値無數仏  
 説是經故 得無量福 漸具功德 疾成仏道

とあるが、不輕菩薩の受けた迫害は不輕菩薩自身の過去の罪障消滅のためのものであり、その行が終わってのちに衆生を救済する仏となり、逆縁によって自らを迫害した者をも成仏させる。しかしながら、鳥の大尉は不輕菩薩とは正反対の行為、つまり殺生をしなければならない存在である。生きるため、仲間を守るためにやむをえずではあっても、殺生は仏教最大の罪である。

しかし、このような殺生も大尉の仲間から見ると、仲間を守るために命をかける英雄的な行為であ

り、忠義や孝行などの徳でもある。これはまた山鳥にとっても同様で、どちらが殺す側か殺される側か、食べる側か食べられる側かはまさに因縁によって決まる。このような仏教思想は、前述、大正7年3月10日宮沢政次郎宛書簡にも共通するものがある。

因縁生起（縁起）は仏教では宇宙の万物の生滅変化を貫く理法とされているが、一般には人間の不幸やものごとの結果はその人の業によるものと言われている。鳥の大尉が、「わたくしが勝つことがいゝのか、山鳥がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません、たゞあなたのお考のとほりです、わたくしはわたくしにきまつたやうに力いつぱいたゝかひます、みんなみんなあなたのお考へのとほりです」と祈りながら自分に定められた道を精一杯生きるのは、生死も行為もすべては因縁や業によって決定されるため、マジエル様＝仏に祈りながら正しい道を行かなければならないからである。

日蓮は「当体義抄」に、

問う一切衆生の当体即妙法の全体ならば、地獄乃至九界の業因・業果も皆是れ妙法の体なるや。答ふ、法性の妙理に染浄の二法有り。染法は薫じて迷ひと成り、浄法は薫じて悟りと成る。悟りは即ち仏界なり、迷ひは即ち衆生なり。此の迷悟の二法、二なりと雖も然も法性真如の一理なり。（中略）一妙真如の理なりと雖も、悪縁に遇へば迷ひと成り、善縁に遇へば悟りと成る。悟りは即ち法性なり、迷ひは即ち無明なり。

と記し、「此の迷悟の二法、二なりと雖も然も法性真如の一理」だが、悪縁に遭えば迷うので、すべてのことは「善悟の法性」＝妙法蓮華経を本と為すようにと説いている。

山鳥を殺した鳥の大尉（少佐）は「法性真如の一理」をもって、殺された山鳥のみならず、生きとし生けるものために祈る。山男の陳に対する〈同情〉も同じような感情である。この場合の〈同情〉とは単なる憐みではなく、不軽菩薩の「我深敬汝等 不敢輕慢 所以者何 汝等皆行菩薩道 当得作仏」の境地、すなわち相手の法性を尊ぶ姿勢を表している。そして、鳥の大尉（少佐）のように相手のみならず全ての法性を礼拝することが、すなわち一切衆生悉皆成仏を願う事になるのである。

また、前述の大正七年五月十九日 保阪嘉内宛書簡には、

又屠殺場の紅く染まつた床の上を豚がひきずられて全身あかく血がつかまりました。（中略）忽然として死がいたり、豚は暗い、しびれのする様な軽さを感じやがてあらたなるかなしいけだものを生を得ました。これらを食べる人とても何とて幸福でありませうや。（中略）おらは悲しい一切の生あるものが只今でもその循環小数の輪廻をたち切つて輝くそらに飛びたつその道の開かれたこと、そのみちを開いた人の為には泣いたとて尽きない。身を粉にしても何でもない。（中略）この人はとうとうはてなき空間のたゞけしの種子ほどのすきまをものこさずにその身をもって供養した。大聖大慈大悲心、思へば泪もとゞまらず 大慈大悲大恩徳いつの劫にか報ずべき。

ねがわくはこの功德をあまねく一切に及ぼして十界百界もろともに全しく仏道成就せん。一人成仏すれば三千大千世界山川草木虫魚禽獸みなともに成仏だ。

と記されている。賢治はこの書簡にあるように、他の命を犠牲にしなければ生きて行けない生物の業、そして他の命のために自らの命を落とさねばならない生物の業を悲しみ、諸行無常を悲しんだ結果、このような悲しい業をもつ一切衆生が悉く皆成仏するよう願わずにはいられなかったのである。「ねがわくはこの功德をあまねく一切に及ぼして十界百界もろともに同じく仏道成就せん」は、「妙法

蓮華經 化城喻品第七」の「願意此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道」であり、これは菩薩道を行じる賢治の「上求菩提下化衆生」の祈りに他ならないのであり、これが鳥の大尉（少佐）の祈りへとつながっているのである。

## 6. まとめ

大林太良「鳥勸請—東亜、東南アジアにおける穂落神話に対応する農耕儀礼」（『東洋文化研究所紀要』（40）1966-03東京大学東洋文化研究所）によると、鳥勸請は水稻耕作文化に属する習俗であるが、もとは穂落神話と結びつき、水稻耕作に先行する焼畑雑穀栽培文化に属する鳥喰儀礼として営まれてきたものであるという。

また、山の神について、「春の農神祭りは三月の十六日の早朝であって、団子を十六個拵えて農神様に供えると共に家族もいただく。この日山の神様が山に帰り、代って農神様が里にお出ましになり、農作を保護なさる」（『農民生活変遷中心の滝沢村史』「第二章 農民生活変遷の各説」）とあり、花巻でも3月16日は農神おろしといって、山の神が里に舞いおり、農神（田の神）になると信じられていた（「花巻民俗資料館」HP 農神降ろしの項）ことから、この地方には山の神が春になると山から下り、田の神になる春秋去来の伝承があると考えられる。

上記のような山の神と田の神の春秋去来は、祖霊信仰と結びつき、祖霊が正月に山から下りてくるという伝承にもつながっている。

このように考えると、鳥は山の神の使者であるとともに田の神（農耕神）の使者であり、鳥勸請のような儀礼が盛んになったことや初山と結びついていることも理解できるが、ここで重要なのは鳥が山という祖霊の住む異界＝死の国の使者であり、田の神（農耕神）が齋す豊穰の使者でもあるということである。

「鳥の北斗七星」が鳥である理由は、生と死の世界を表象させるのにふさわしい存在であること、そして、山鳥が殺され、大尉（少佐）が生還することで、山の神から田の神への春秋去来と来るべき春への喜び（子孫繁栄や豊穰）が創造されることでもある。

仲間を守るため、生存競争に生き残るための鳥の戦いは回避が不可能であり、弱肉強食が自然界の掟でもある。しかし、一切衆生悉皆成仏を考えると、〈自利利他〉の区別はなくなり、自己の存在をも含め、すべての存在は「法界<sub>よ</sub>法界<sub>よ</sub>礼拝スル」（『御義口伝』「常不軽品三十箇の大事 第廿九法界礼拝住処の事」）ことになる。

仏法は因縁論であり、生きるために殺生をしなければならない鳥は、悪業を転重軽受するために鳥の北斗七星（妙法蓮華經）を信仰する。鳥が『法華經』を信仰していることは、鳥がマジエル様こと北斗七星を信仰すること（妙見信仰）により証明される。妙見信仰（北辰信仰）は日蓮と深い関係にあるからである。

日々生存競争にさらされている鳥は、夜になると天敵である梟などの猛禽類に狙われる立場になる。殺生という悪業を行い、闇夜に天敵の襲撃を恐れる鳥は、月のない闇夜に猛禽類に襲われ、殺されると思しき悪夢を見る。その心理には、襲われる恐怖と共に、生きるために他の生命を奪い、戦わなくてはならない自らの業の深さへの怯えも隠されている。

賢治の鳥に対する観察力は「シルバースポット」に描かれたシートンのそれと非常によく似ている。鳥の能力から群れの訓練まで、内容も観察も同様のものが多々見受けられる。

そして、「戦う者の内的感情」とは、生きるためとはいえ、殺生という重い業を背負いながらも娑婆世界を精一杯生きていかねばならない存在が、それでも一切衆生悉皆成仏を求めて祈りを捧げなければいけない感情である。なぜならば、鳥の大尉（少佐）は賢治同様、「願意此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道」と祈っており、仲間のために相手を斃すことだけを考えるだけではないからである。

「報恩抄」に「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり。無限地獄の道をふさぎぬ」とあるが、賢治は捕食関係・敵対関係や種の差異などを超越して一切衆生に法性を見出し、一切衆生悉皆成仏を祈っている。その祈りがそのまま、鳥の少佐（大尉）の「あゝ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません」という祈りに象徴されている。

本作品は、GHQの検閲で削除されたことや、学徒出陣で戦死した佐々木八郎の『『愛』と『戦』と『死』—宮沢賢治作“鳥の北斗七星”に関連して—』などの視点から戦争礼賛とみる論と、殺生を否定し大尉の祈りにヒューマニズムを見る論とに大きく分かれてきた。

その中で平沢信一は「鳥の北斗七星」(『宮沢賢治の全童話を読む』学燈社 平成15年)で「憎めない敵を殺さなくてはならないような戦争そのものを疑問に付さず、戦争を美化してしまう危険性を繰り返し批判されるいっぽう、そうした評価を乗り越えようとして、鳥と山鳥の戦いを自然の摂理として受け入れる立場から読み解かれてきた」とまとめ、栗原敦は「擬人法による人間世界とのアナロジー(類同)という重層化を前提として成立」(「〈夢〉と〈起源〉の物語『注文の多い料理店』」『実践國文學』70 2006年)したとして矛盾そのままに読むべきであると述べている。

しかしながら、鳥の北斗七星信仰や鳥の大尉（少佐）の祈りとその思想、宮沢賢治自身の法華経信仰や生き方を考えると、そこには法性の平等、すなわち一切衆生悉皆成仏の慈悲が秘められていることは認めざるを得ない事実である。

確かに、鳥の大尉（少佐）は山鳥を殺したが、もし反対に自分が殺されたとしてもそれが法（ダルマ）であり因縁であればその運命を全うすると祈っている。戦争や弱肉強食がたとえ生きるための手段であったとしても、その全てが各々の業となり因縁が生じるため、鳥の大尉は何があろうと信仰者であるがゆえに、それを全身全霊で受け止めようとしたのである。

また、鳥の生態から軍隊を想像したのは時代の影響だけではなく、シートン同様にその観察力によるところが大きいと思われる。

鳥の食性は雑食であり、穀類のみならず、昆虫や小鳥の卵や雛なども捕食し（ハシブトガラスなどは小獣も捕食する）、腐肉食（死体食）も行うとされている。また、小鳥や死骸のみならず、時には同じ群れ以外の鳥の卵や雛、弱った固体なども襲うこともあるとされる悪食の鳥であるが、少佐（大尉）の群れは食料不足の厳冬のイーハトヴにもかかわらず、敵を手厚く葬ろうとしている。これは生きることに伴う業を自覚しながら、相手の法性を礼拝するという信仰心の表出である。

そして、その祈りの先には春の訪れとともにやってくる、農耕の豊穡への祈りや繁殖という子孫繁



栄が内包されているのである。

冒頭にある「つめたいいぢの悪い雲が、地べたにすれすれに垂れ」るほどの悪天候で、鳥たちが地面から飛び立てない状況は、生きるという重い業を背負った姿の様に感じられる。また、夜空の割れ目から腕が伸びる悪夢は、逃れることのできない生物の悲しい業を暗示しているかのようでもある。

そして、最後の部分に、

美しくまつ黒な砲艦の鳥は、そのあひだ中、みんなといつしよに、不動の姿勢をとつて列びながら、始終きらきらきら涙をこぼしました。砲艦長はそれを見ないふりしてゐました。あしたから、また許嫁といつしよに、演習ができるのです。あんまりうれしいので、たびたび嘴を大きくあけて、まつ赤に日光に透かせましたが、それも砲艦長は横を向いて見逃がしてゐました。

とあるが、つがいとして二人で過ごす春は、鳥の大尉と許婚だけの喜びではなく、春という大地の甦りや子孫繁栄の喜びにもつながっていく。また、山鳥が死に田の鳥が繁盛することで、来るべき田の神を向かえ、豊作へとつながる未来を読み説くこともできるだろう。

大尉を見守る許婚の姿は、死の対極である生の象徴であるとともに、自らに禁欲主義を課し修羅を歩いていた賢治の一つの春の風景であったのかもしれない。

#### 参考文献：

- 『新校本 宮沢賢治全集』 筑摩書房 1995年  
『平成新編 日蓮大聖人御書』 第2刷 日蓮正宗総本山 大石寺 平成9年  
Ernest Thompson Seton 『Wild・Animals・I・Have・Known』 1898年  
<http://archive.org/details/wildanimalsihave00seto>  
『妙法蓮華経並開結』 法華経普及会 株式会社平楽寺書店 平成20年  
『定本 柳田國男集』 筑摩書店 昭和53年 第14冊  
『日本大百科全書』 小学館 2008年11月  
『日本民俗大辞典』 株式会社吉川弘文館 2000年3月  
『宮沢賢治大事典』 勉誠出版(株) 平成19年8月  
原子朗著『新 宮沢賢治語彙辞典』 東京書籍株式会社 1999年7月  
今泉吉晴訳・解説『シートン動物記 シルバースポット』 童心社 2011年  
赤田秀子他著『賢治鳥類学』 株式会社 新曜社 1998年  
続橋達雄編『宮沢賢治研究叢書6「注文の多い料理店」研究Ⅱ』 株式会社学藝書林 1975年 12月  
赤坂憲雄・吉田文憲編著『「注文の多い料理店」考』 五柳書院 1995年4月  
『宮沢賢治の全童話を読む』 学燈社 平成15年  
石川修道「日蓮聖人『立教開宗』における妙見尊と虚空蔵菩薩の関係」『現代宗教研究 32号 NO.8』 日蓮宗 現代宗教研究所 平成10年3月  
杉浦静「『鳥の北斗七星』小考—草稿まで—」『国文学解釈と鑑賞』 第66巻8号 至文堂 2001年8月  
栗原敦「〈夢〉と〈起源〉の物語『注文の多い料理店』」『実践國文學』 70 実践女子大学 2006年10月  
大林太良「鳥勸請—東亜、東南アジアにおける穂落神話に対応する農耕儀礼」『東洋文化研究所紀要』(40) 1966-03 東京大学東洋文化研究所  
千田洋幸「宮沢賢治『鳥の北斗七星』と戦争のディスクール」『学芸国語国文学』 30 1998年 東京学芸大学  
安藤恭子「〈宮沢賢治〉の表現をめぐって—『鳥の北斗七星』における擬人法—」『日本文学研究論文集35 宮沢賢治』 若草書房 1997年

大島丈志「宮沢賢治『鳥の北斗七星』を読み直す一戦いと泪の視点より一」『賢治研究』90 宮沢賢治研究会 2003年

『農民生活変遷中心の滝沢村誌』滝沢村教育委員会 2011年4月

<http://www.vill.takizawa.iwate.jp/contents/sonshi/web/index.html> 最終閲覧 2012年10月28日 3時35分

「花巻民俗資料館」<http://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkaka/siryokan/gaiyo.htm> 最終閲覧 2012年10月28日 3時43分

〈賢治の置土産～七つ森から溶岩流まで〉181 岡澤敏男 童話「鳥の北斗七星」盛岡タイムス Web News 2010年10月9日(土)

<http://www.morioka-times.com/news/2010/1010/09/10100902.htm> 最終閲覧 2012年11月8日18時17分

## A Study of ‘ the Grate Bear of Crow’

TAKAHASHI Naomi

I considered on a ‘significance that a hero is a crow and inner feeling of a fighting one’ in its advertisement in in ‘the Grate Bear of a Crow’, which was recorded in a novel of Kenji Miyazawa’s ‘a restaurant taking many food order’. A crow is a messenger of mountain god and of the god of a rice field (an agricultural god), so courtesy such as 「烏勸請」 is very popular, while a crow is ominous existence which makes death image, too. So some reasons why ‘the Great Bear of Crow’ is a crow are considered as a symbol of fertility of a rice field in spring because of existence matching with the image of the world of the life and death or of a country crow’s winning at the struggle for existence. Crow’s battle which the struggle for existence for their survival means cannot avoid because it is the world of the law of the jungle. But if one thinks of 「一切衆生皆悉成仏」, Distinction between one’s friends and foes disappears and one only preaches ‘the Lotus Sutra’, the teaching that one will change the law of fate and evil deeds and make one turn in one’s grave. Therefore, a crow which must commit a crime for his survival has faith in the Grate Bear because it is concerned with Nichiren Shu (日蓮宗). Also, Kenji’s attitude and his point of view which watch a crow looks like ‘Silver Spot’ recorded in Seton’s “Wild animal I have known”. He compares a crow to an army, distinguishes tearful voices and gives full scope to his ability as a good observer in the ecology of a crow.

**Key words:** a crow, E. T. Seton “Wild animal I have Known”, Nichiren